雛道具にかかわった人①　柿沼谷蔵　　史料番号 4601

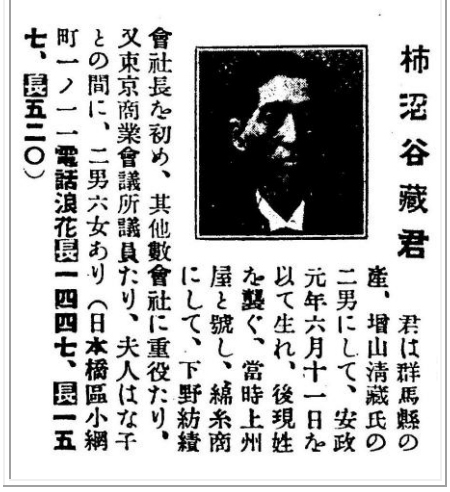
明治中期から大正にかけて活躍した実業家。

安政元年（1854）6月 11 日、上州（群馬県）邑楽郡館林の増山清蔵の次男として生まれた。

幼少の頃から天資温厚で機智に富んだという。

明治 12 年（1879）、25 才の時、東京に出て綿糸業を営む柿沼家の養子となる。家業の上州屋は当時の綿糸の急速な需要増に乗って隆盛を極め、明治 20 年（1887）、それまでの日本橋区堀江町４丁目３番地から小網町１丁目 11 番地に移る。

明治人物事典より


柿沼谷藏君

君は群馬縣の産、增山清藏氏の二男にして、安政元年六月十一日を以て生れ、後現姓を襲ぐ、當時上州屋と號し、綿糸商にして、下野紡績會社長を初め、其他數會社に重役たり、又東京商業會議所議員たり、夫人はなヲとの間に、二男六女あり（日本橋區小網町一ノ一一電話浪花局一四四七、局五二〇）

谷蔵は綿糸の商いだけに飽き足らず紡績業にも手を出し、冨士紡績株式会社、東京瓦斯紡績株式会社、下野紡績株式会社、三重紡績株式会社などの事業に参画し取締役をつとめる。三重紡績は後に大阪紡績、呉羽紡績と合併し、国内三指に数えられる東洋紡績となった。

紡績業以外にも金町製瓦株式会社、東製紙株式会社、東京製紙株式会社等の監査役をつとめ、また帝國海上保険株武会社の相談役や日本メリヤス製造株式会社の評議員、東京商業会議所議員など実業家として幅広い活躍をした。

綿糸業、紡績業などで蓄えた財力で社会にも貢献している。明治 25 年（1892）11 月から大正２年（1913）にかけて何期も日本橋区会議員をつとめ、この間に区会議長にもなっている。また明治 34 年（1901）、後の昭和天皇となる皇太孫の誕生を祝う大典の日本橋区御大典委員にもなっている。明治 38 年（1905）には日本橋区財政委員になり、地域開発にも貢献している。

女子教育にも関心を持ち、明治 21 年（1888）明治の元勲、皇族、華族、実業家らとともにに女子教育奨励会を設立し、設立委員に名を連ねている。

恵まれた財力は美術品の蒐集にも向い、絵画、彫刻など膨大な美術品を集めた。こうした柿沼家の絶頂期に、同じ日本橋区会議員だった縁で、仁杉英と知り合いになった。仁杉は日本橋区会議員、東京市会議員などを長年つとめ、一時は衆議院議員もつとめていたが、度重なる選挙で家宝も手放さなければならない状況になっていたので、仁杉家の家宝で、八丁掘の名物と言われていた雛道具を譲り受けた。

しかし、隆盛だった柿沼家も大正後期には綿糸の不況で家勢が傾き始め、蒐集した美術品も処分されはじめた。

大正 11 年(1922)５月には蒐集した美術品 300 点以上が売り立てになっている。

東京国立博物館にある御蔵品入札目録によれば、光琳・文晁・崋山・宗達などの名だたる巨匠の逸品も含まれていた。その後、昭和６年（1931）６月には息子の正造により、父親の代に蒐集した美術品が処分された。